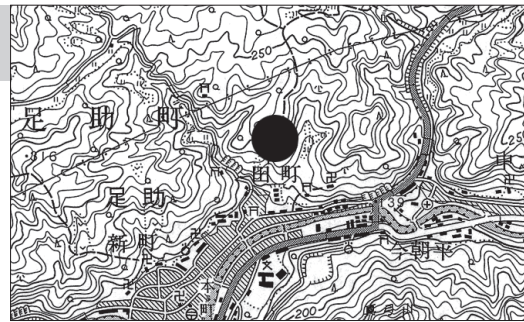


しろやまじょう
城山城跡

所在地 東加茂郡足助町字城山及び引陣地内
調査理由 国道 153 号足助バイパス建設
調査期間 平成 12 年 11 月～平成 13 年 3 月
調査積 1,300 m²
担当者 花井 伸・成瀬友弘・永井邦仁



調査地点 (1/2.5 万「足助」)

調査の経過 城山城跡は、足助町内にある戦国時代の山城を主体とする遺跡で、およそ 350 m × 150 m の規模と推定されている。国道 153 号足助バイパス建設に伴う事前調査として、国土交通省より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた。主郭から南西方向に伸びる 4 つの尾根を調査対象地とし、平成 12 年度は、西から 2 つの尾根について調査を行った。

立地と環境 足助川の北岸に位置し、標高約 175 ～ 230 m の、山頂から南西へ伸びる尾根上に展開する。西側はおせん川の流れる谷に面し、東隣の尾根群には大観音城跡がある。また、市街地をはさんで南方の真弓山城跡と対面し、その西方に飯盛山城跡も視界に入る。

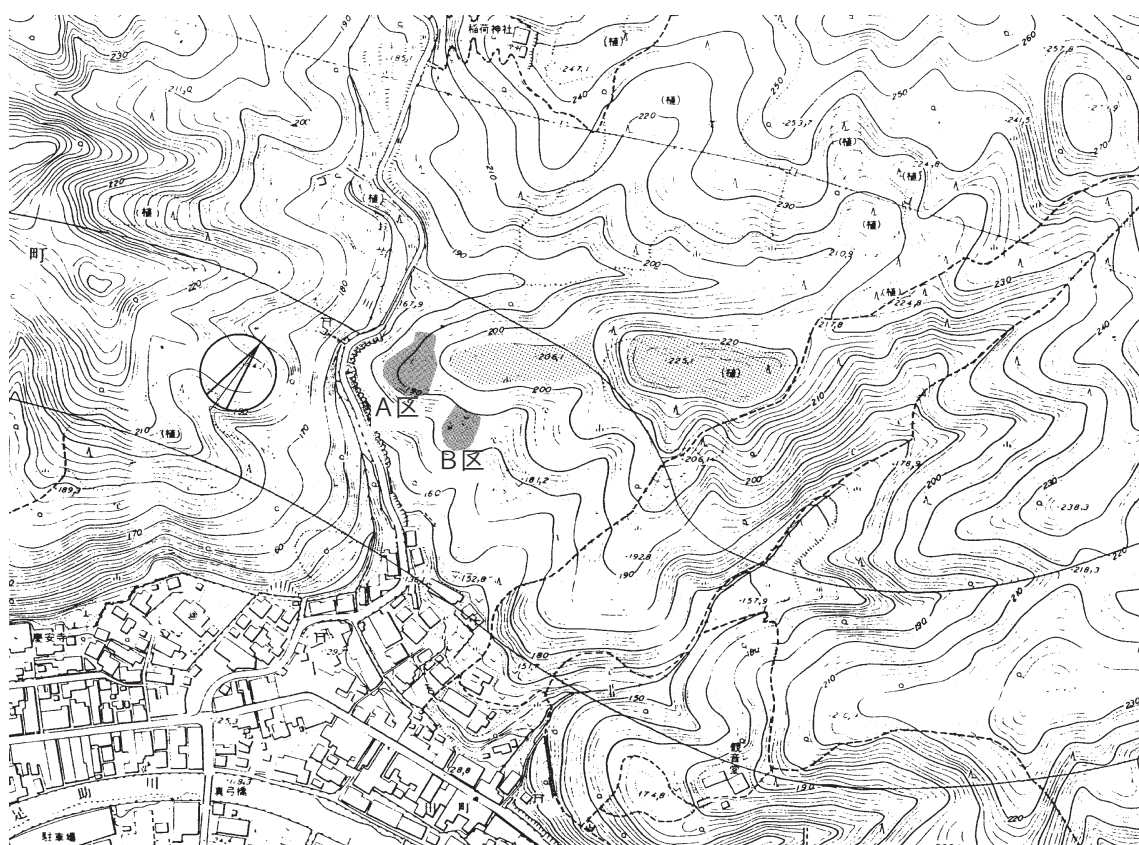
調査の概要 尾根の西端部を A 区とし、尾根の南側にとりつく小さな尾根を B 区とした。

A 区では、幅約 7.5 m、深さ約 2.5 m の堀切が確認された。断面は逆台形を呈し、底辺は約 3.5 m である。地形観察から、堀切は下方の斜面まで伸びているとみられ、完全に尾根を断ち切る防御性の強いものである。また、堀切底部から山頂方向へは高低差約 10 m、傾斜角 57° の人工的な急斜面（切岸）になっており、その上には、主郭に準ずる規模の曲輪が想定される平場があることから、重要な防御施設であったことを伺わせる。出土遺物は、少量ではあるが土師器鍋や青磁碗の小片があり、山城に関わるものとみられるが、時期の特定には至っていない。一方堀切上層や周辺の表土からは 19 世紀以降の陶磁器や瓦・砥石などが比較的多く出土しており、耕作地になっていた頃に持ち込まれたものとみられる。堀切より西側で確認された土坑も、ほとんどが耕作の際に掘られたものと推定される。

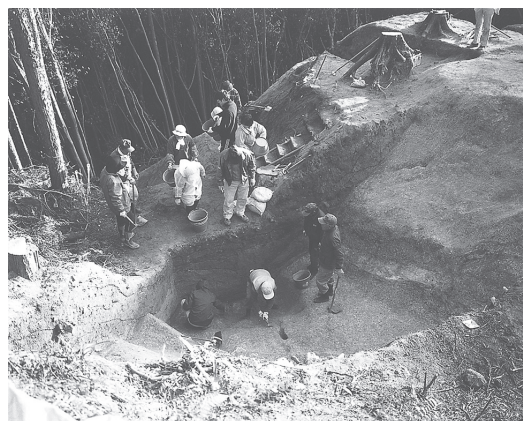
B 区では、腰曲輪がほぼ完全な形で検出することができた。腰曲輪上面は約 50 m²、そこから高低差約 4 m、傾斜角 70° の切岸を経て、曲輪下の幅 1.4 m、深さ 85 cm の断面 V 字形の堀に至る。堀はややカーブしながら尾根を断ち切るようにして伸びており、曲輪前面を防御するようになっている。堀底部からは長軸 20 cm 以下の円礫・角礫が 50 点ほど出土した以外には、志野皿の小片が 1 点あるのみである。一方、切岸や付近の表土からは 16 世紀後半に位置づけられる土師器羽釜・鍋・小皿や常滑甕などが出土しており、腰曲輪の機能していた時期を示していると考えられる。なお、堀から下方は傾斜角 30° の切岸が谷底に向かって続いているが、曲輪下の切岸ともども竖堀などの造作は確認されなかった。

調査の結果、A・B 区が城山城の西端部にあたることが判明し、それぞれの地点で特徴的な防御施設を確認することができた。これらはいずれも城の西側にある谷からの攻撃などに備えたものであろう。谷を北方へ上る道は古く遡る可能性があり、交通の監視も意識していたのではないだろうか。また、B 区で出土した生活雑器類は、腰曲輪において短期間ではあるが日常的な生活があったことを伺わせる。

(永井邦仁)



調査区位置と主な推定曲輪の位置図 (1:2,000)



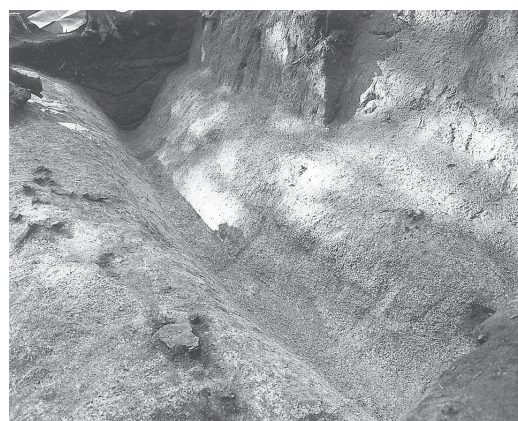
A区 堀切作業風景



A区 堀切断面



B区 下方の切岸



B区 曲輪下の堀